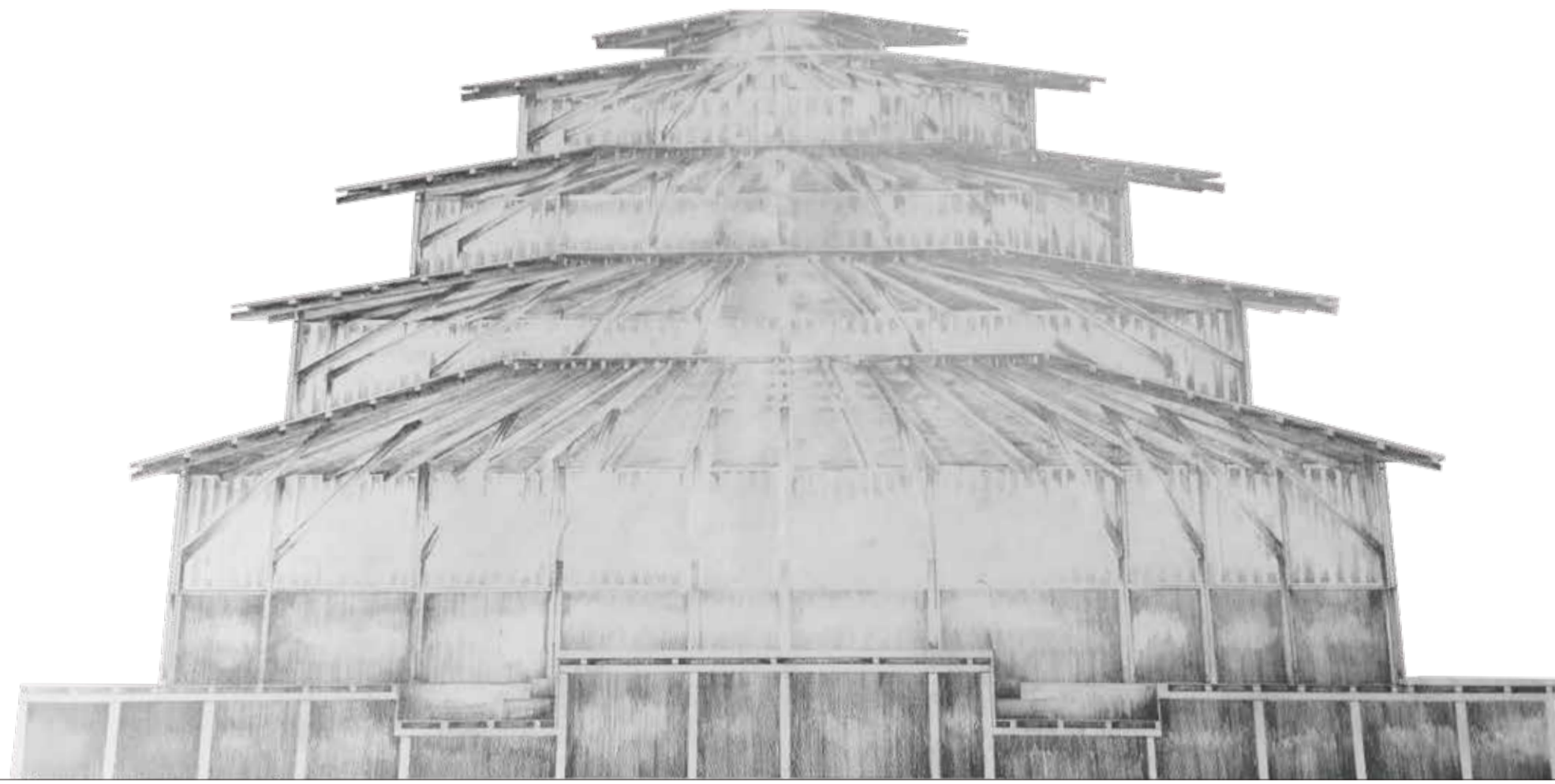


女川町に新たな寺院建築の提案



女川町に人々が集うことのできる新しい形の寺院建築を計画する。

私は2011年以降、女川町でのボランティア活動を度々経験し、現在も復興工事に追われている女川町の様子を伺いに訪れている。毎回訪れるたびに、女川町には人の賑わいを感じる事が出来ない。その影響は、町の存続の危機となりつつあると私は考える。これらの現状より、この街には、町民が集い、コミュニティの中心となる場を作る事が、責務であると感じている。

ボランティアに行く中で、私は女川町照源寺の住職さんに出会い、照源寺では町民のため、音楽会を中心とした、様々な催しを開催できるよう寺院内を無償で貸し出している試みを知った。

実際に照源寺を訪れ、「地域の中心」と成りうる可能性をもっていき、女川町にとって賑わいを生む拠点となるような、新しい形の寺院建築をこの場に計画する。

音源堂

女川町照源寺から始まる、寺院に人々が集う場の提案

女川町



町外転出と高齢化
宮城県は2015年度女川町の人口減少率は、37.0%という数値であり、県内で最も大きい事が明らかになった。女川町の町人口は、2015年現在6334人。女川町の人口減少率は最も高い。震災後、平地が少なく、宅地整備には山を切り崩すなど大規模な造成が必要であり、他の被災自治体よりも時間がかかる間にやむを得ず町外へ転出した住民も少なくない。

コミュニティの再考
「宅地造成の影響で、街から人の賑わいが失われている。」私は、浦宿浜に位置する照源寺の三宅住職の話を知った。家々周辺は、工事車が走り、コミュニティ形成の機会、場がないという事を危惧し、三宅氏は、寺院内を開放し、音楽会や緑日、演劇、座禅、仏前式等の催し物を外に向けて開催している。周辺住民は、必ず集っているそうである。女川町民は、コミュニティを形成する場を欲している。音楽会や緑日等の既存のプログラムから、町民の為の特別な場を考える。



照源寺の立地特
女川町の町民にとって寺院は「津波があったら、山へ逃げろ」といわれるように、震災時には、多くの町民が、山の上の神社仏閣へと避難をしてきた。照源寺も多くの避難者を受け入れた。昨今、寺離れと言われているが、今回の震災時のように、寺院は、まだ人々の心の中に、重要な役割としてあり続けていると考える。今後また、震災が起きた際、山の上に位置する照源寺が、再び人々を受け入れる先として成りうる。多くの人々を内包する建物を考える。



照源寺内でのFW、ヒアリング、本堂探寸
女川照源寺へ伺い、現在の寺院の状況と女川での寺院と地域との繋がりに関してヒアリング調査、FWを行った。

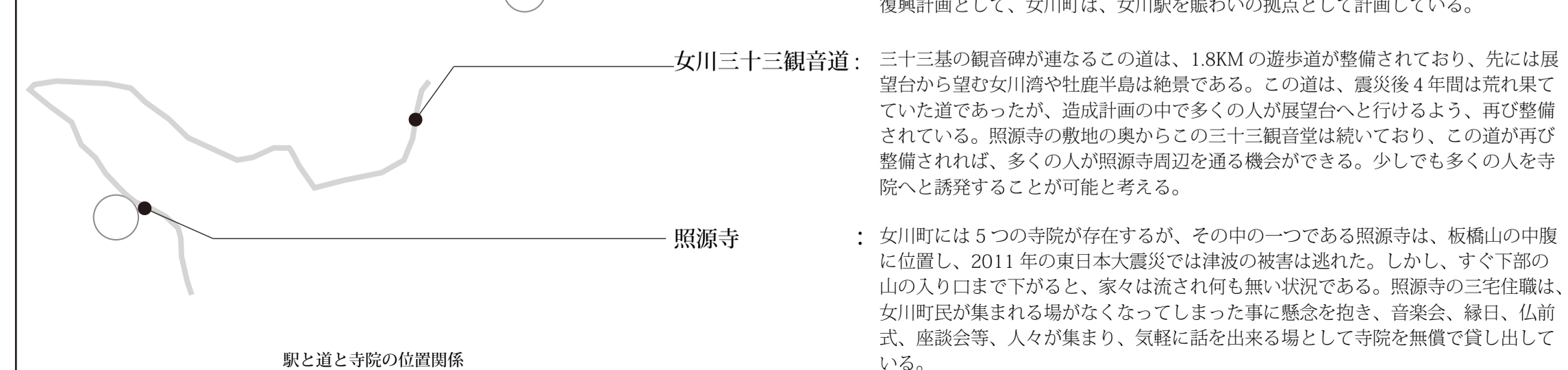


復興の足がかりとなる道



復興しつつある女川町が、現在から未来にかけて、多くの人たちに、町の様子を見てもらう為、この道は震災後、展望台までの道として整備されつつある。この道上に、照源寺は通る。この道は、街が、町民が、復興にむけての足がかりにしている道である。ただの展望台までの道が開通するのではなく、町民の思いが詰まった、この道を復興の道筋とする。照源寺は、いつでも住職の考えとして山門は開いている。この道から来る、全ての人を受け入れる。復興計画の中で整備されている三十三観音道から来る多くの人を想定し、その道筋にある照源寺に人々が集える場を計画する。

復興の為のミチ

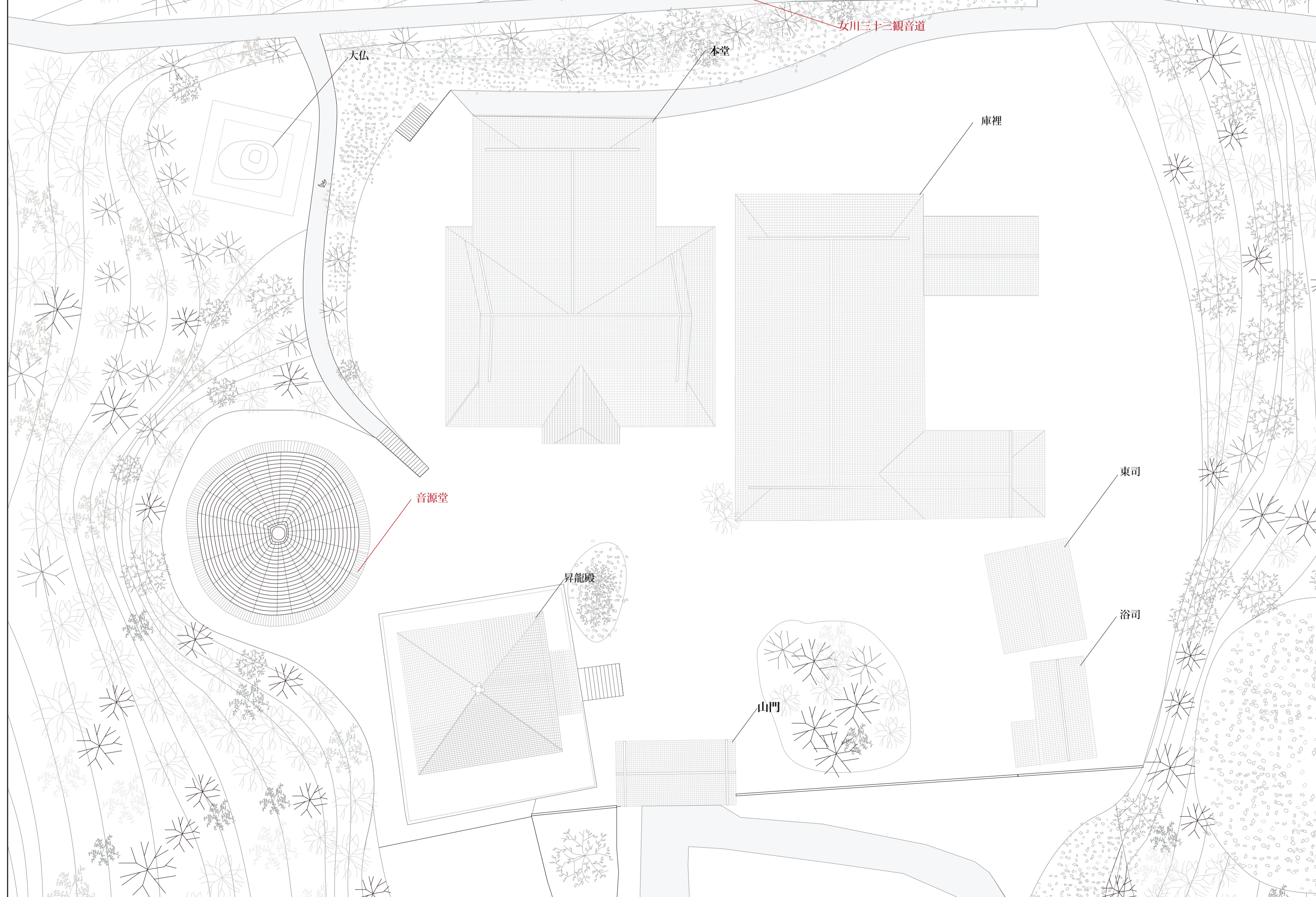


駅と道と寺院の位置関係

敷地計画

女川三十三観音道と照源寺

伝統に縛られた御藍配置の中で、様式に縛られない新たな木造建築の提案



仏教的観念 - 円相



円相とは、禅宗における書画の一つである。

図形の円を一筆で描いたものであり、借りや真理、仏性、宇宙全などを円形で象徴的に表現したものとされるが、その解釈は見る人に任される。円相は絶対の真理を表しているといわれる。円相は、あらゆる生物、自然、この世の中のすべて、ひいては宇宙そのものをも表現している。

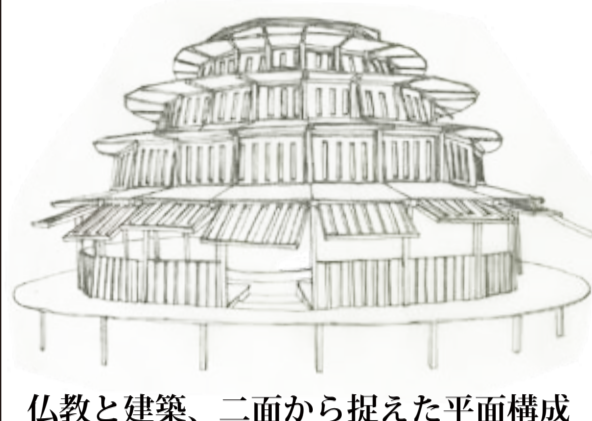
円というほどこまでも途切れることはない。限りなく循環しつづける。これは欠けることのない絶対の真理を表している。「真理」とは、森羅万象に仏の徳が備わっていることである。

今回、設計に円相の概念を取り込み、この建物は仏教の概念より、本来悟りを説明することや、文字で表現することは禁じられているが、この悟りの境地、仏性の本来の姿を形象化したものと考えられる。

建築的観念 - Peacemaking circle

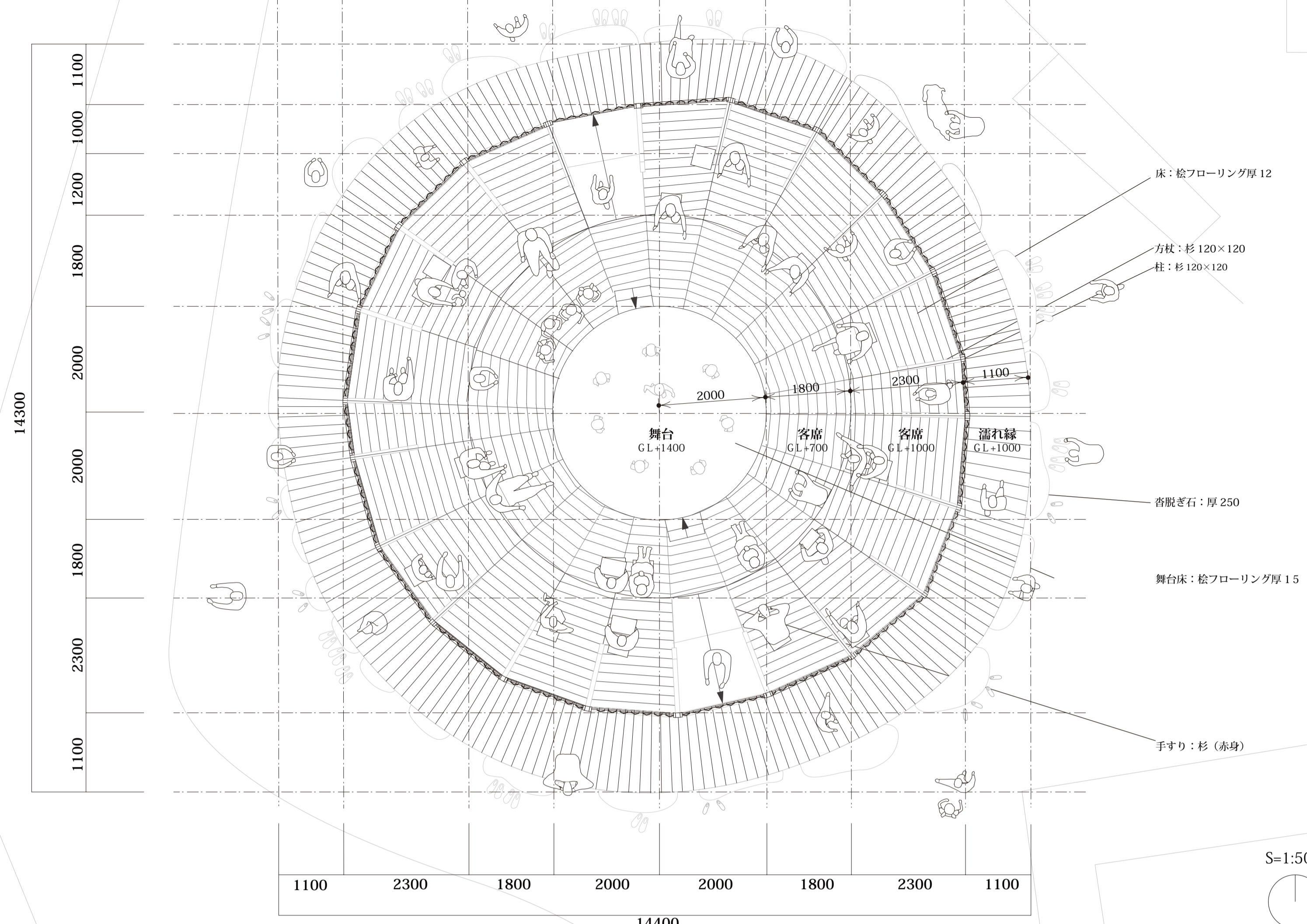


複数の人々が円形に向かい合い、座り、何かを見る・喋ることを、Peacemaking circle という。これは、一定の距離を取り行うことで、自然と精神的に話しやすくなり、互いの表情を見る事も促され、コミュニケーションの活性化が促進される。これは、現在多くの教育施設、精神トレーニング、プライマリケアとしても扱われており、心身にとって効果的な活動である事が証明されている。平面計画では、コミュニティが失われつつある女川町民にとって、心身に効能的に作用した町民同士のコミュニティの活性化を促すことを期待し、このシステムを建築面において利用する。



仏教と建築、二面から捉えた平面構成

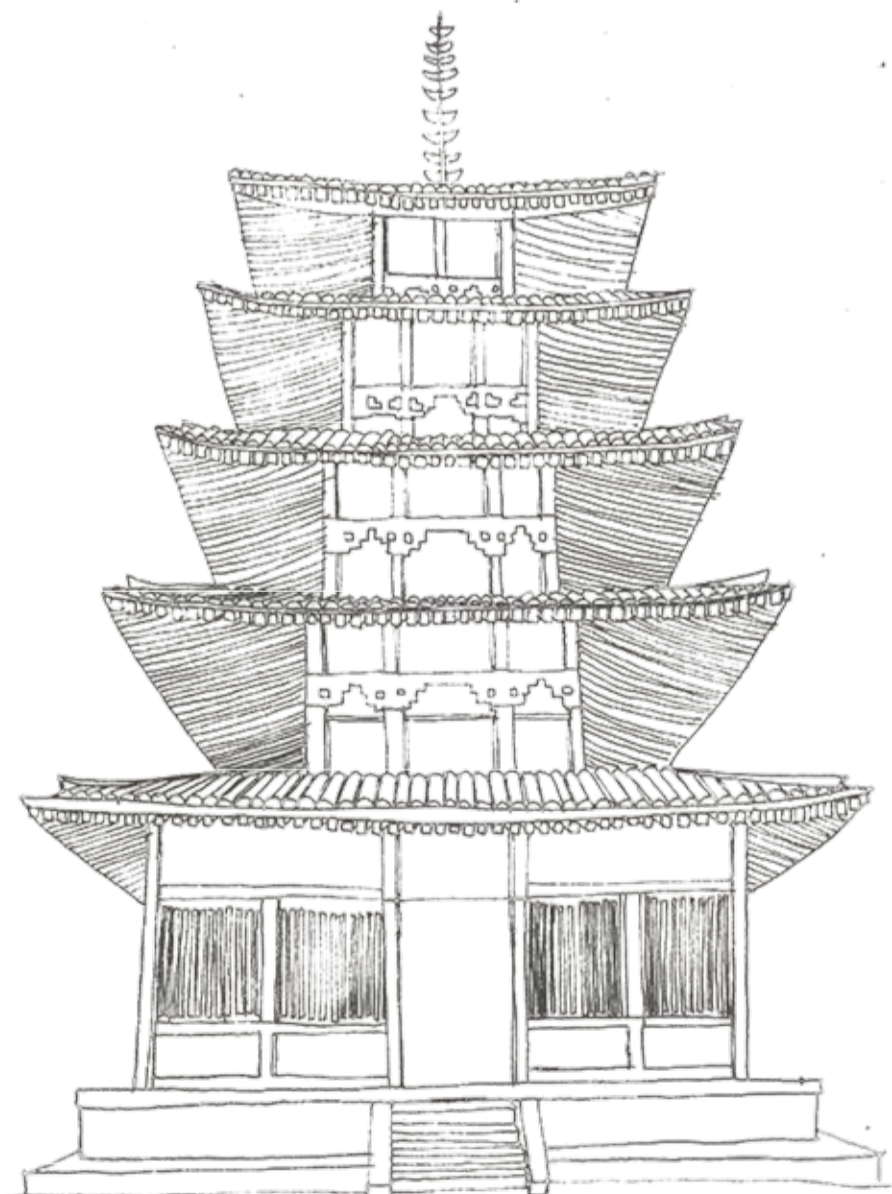
平面図 - Peace making circle に基づき、中心に舞台が配置される円形客席の構成



仏教的観念 - 五重塔

五重塔から呼応される仏教的観念

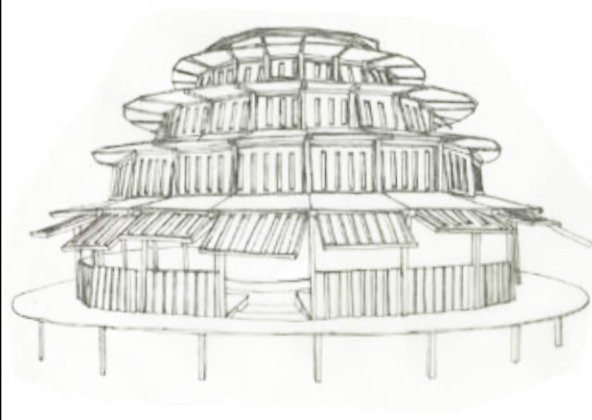
- 包容力 — 空
- 活動 — 風
- 温和 — 火
- 清浄 — 水
- 不変 — 地



五重塔は、五重塔(ごじゅうのとう)は、仏塔の形式の一つである。層塔と呼ばれる楼閣形式の仏塔のうち、五重の屋根を持つものを指し、下から地、水、火、風、空からなるものである。それぞれが5つの世界(五大思想)を示し、仏教的な宇宙観を表している。

五輪塔は日本で考案されたが、五輪の思想は中国から伝わったものである。日本では、礼拝するための仏塔だけに見栄え良く造られており、仏塔を宗教的建築物としてではなく、風景の一部として眺める傾向がある。

今回、仏教としての形式の一つである五層にした建物にする事で、新たな寺院建築を模索しながらも、今までの歴史性を保つ。



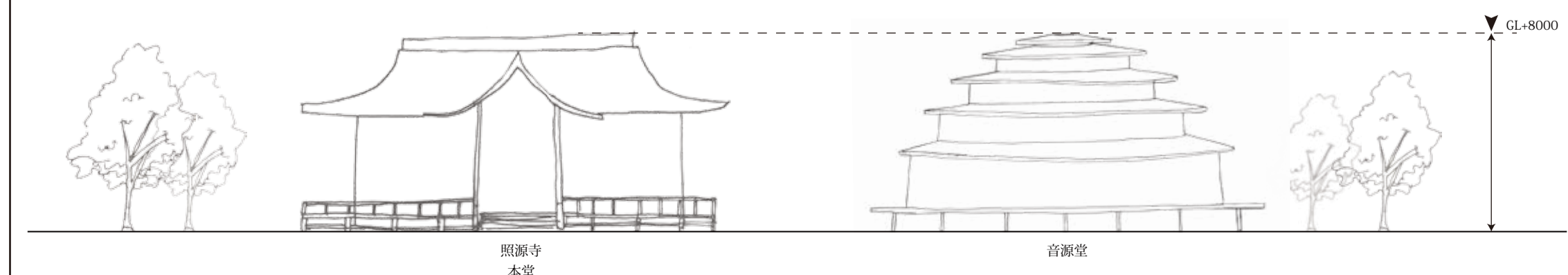
仏教と建築、二面から捉えた断面構成

建築的観念

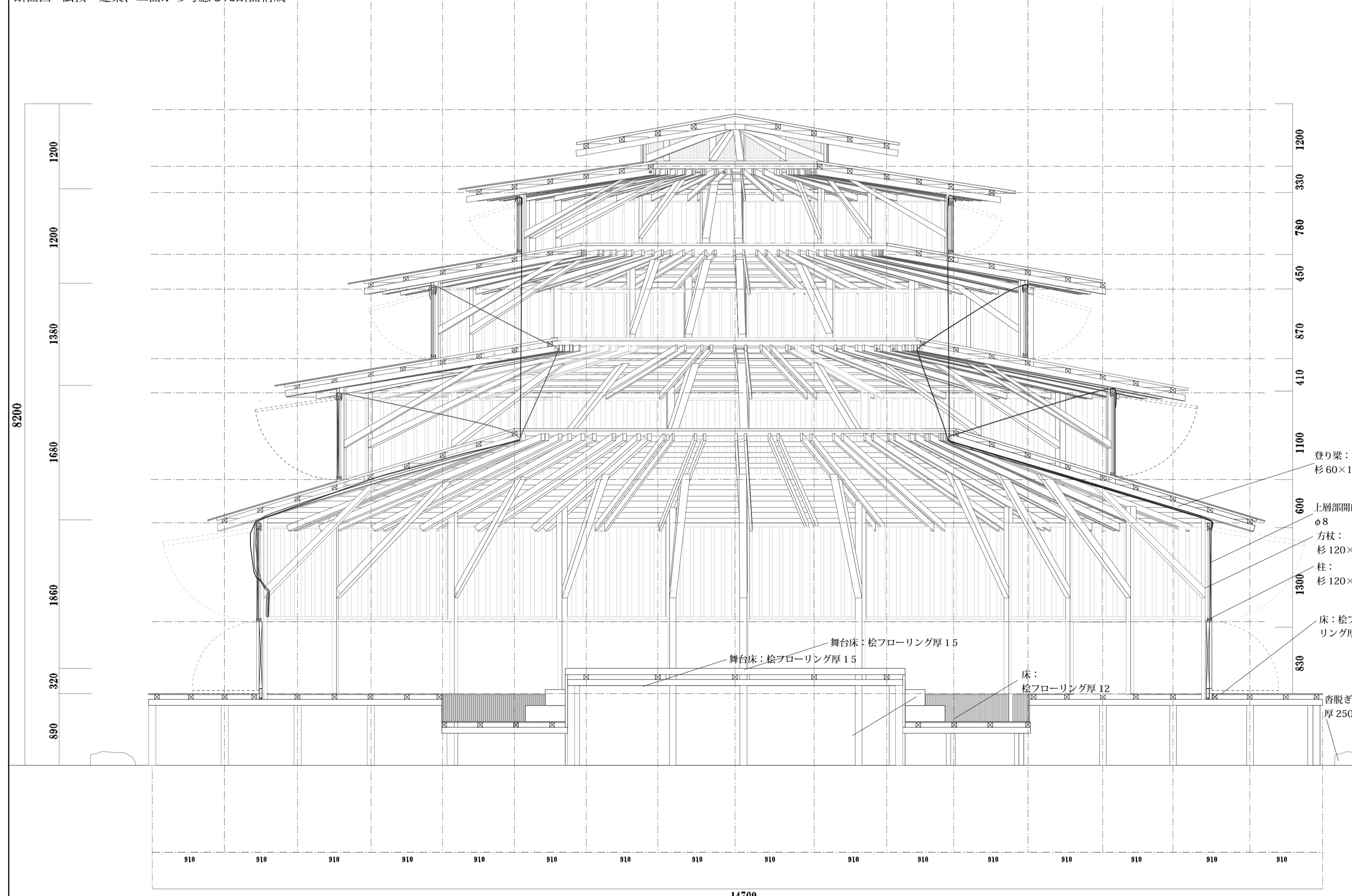
寺院本堂からの連続性、吹き抜け空間。

この音源堂は、本堂の最高の高さと同じ高さ、約8mで計画している。これは訪れる人が既視感を感じ、本堂から連続しているように音源堂を感じさせる為である。

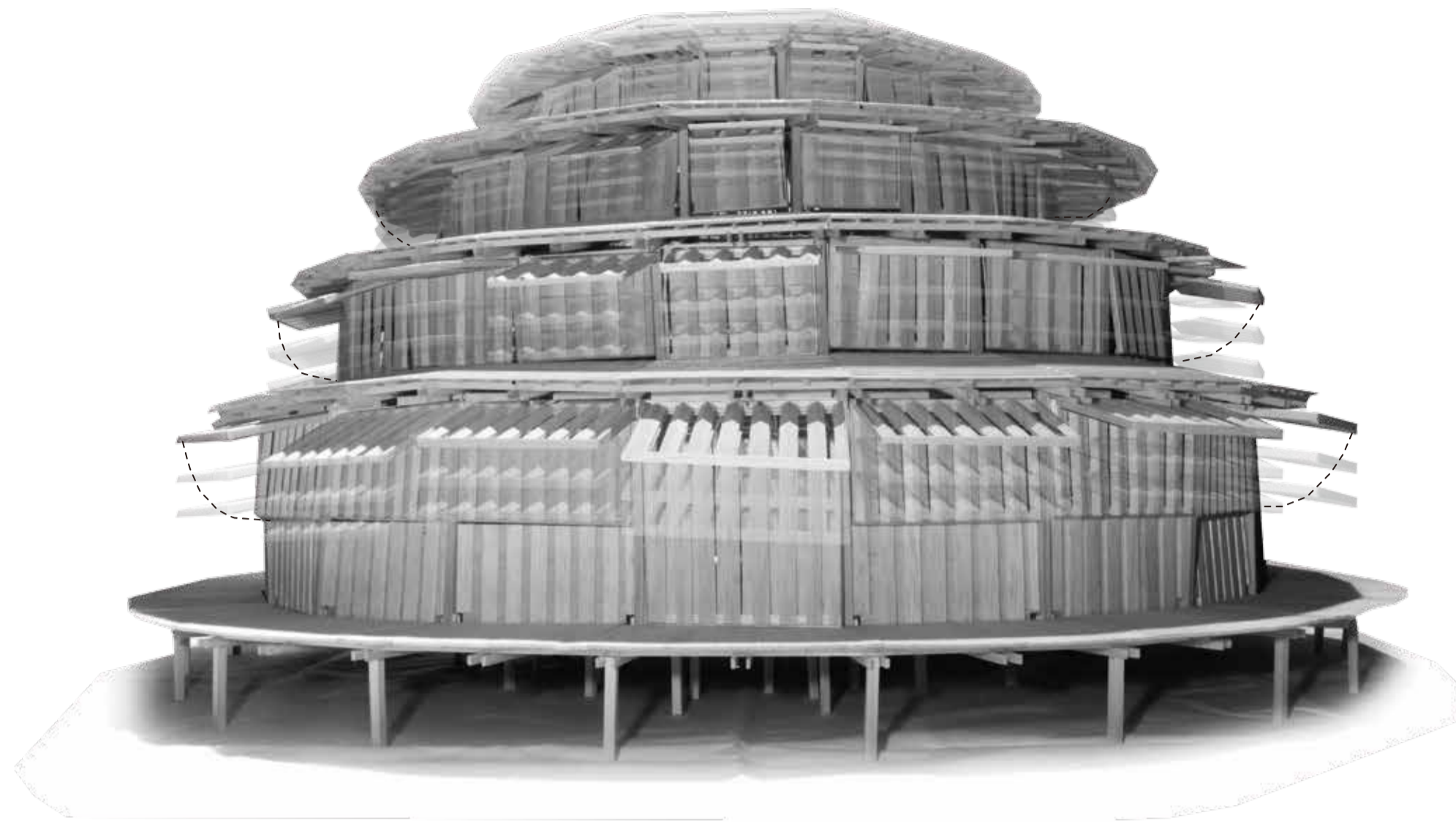
また、最高の高さが8mで、仏教的観念より五層として計画したため、木造で適切な高さ、内部に入り込む採光を考慮し、開高が徐々に低くなるよう5層に割り、断面構成は計画した。



断面図 - 仏教・建築、二面から考慮した断面構成



様々な使用用途に対応した建具



表情が変わる建具

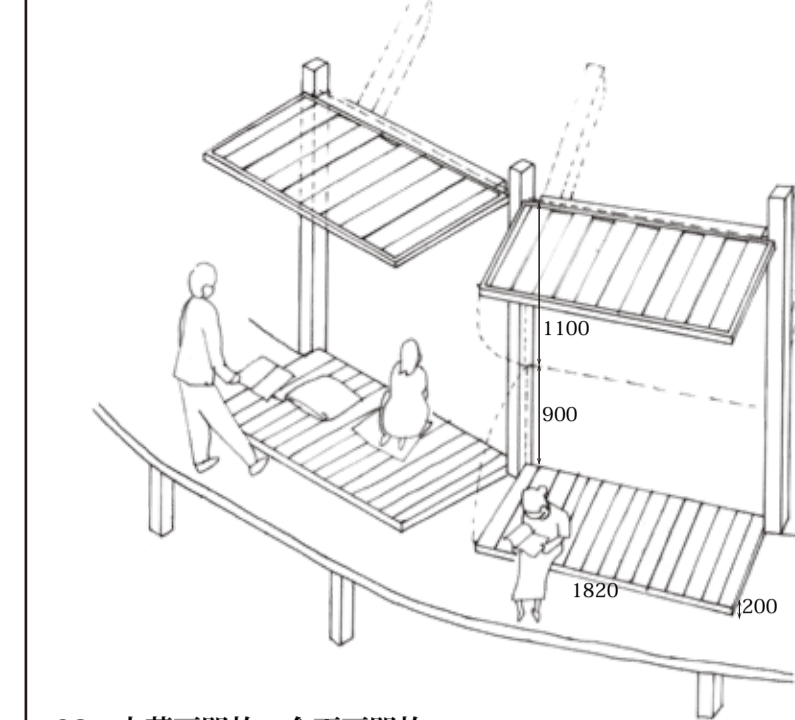
照源寺に計画する人の集まれる場 音源堂は、様々な催しが開催でき、多くの人が集まれる場である。多くの人・催しものを内包するためには、一定の空間ではなく、多くのシーンを内包する空間にすべきである。

そのため、催し物によって、環境や使用者の気分によって、内部の見え方も移り変わる、変動する建具として全体を計画した。

建具の種類

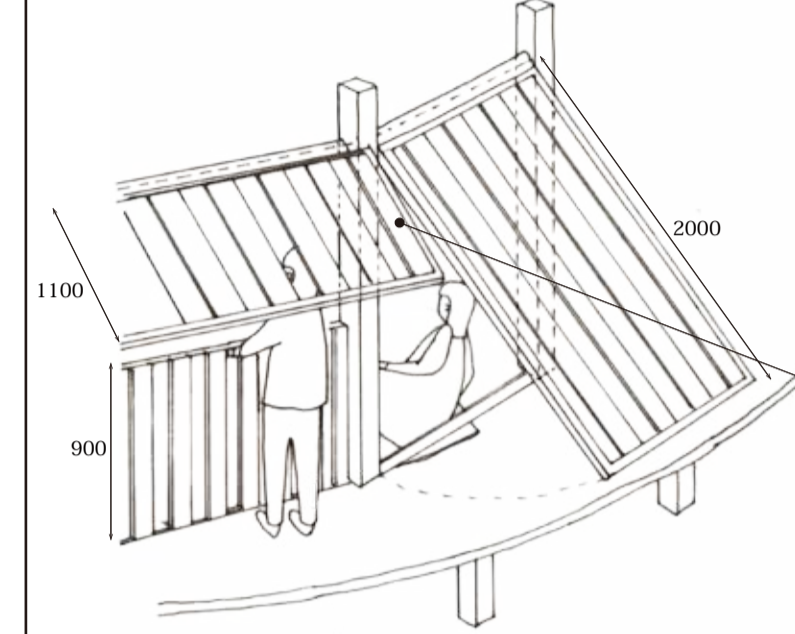
この建物は、中で行なわれる催しによって、天候によって、使用者の気分によって、建具が人力によって動き変化する。変化の仕方は、どれもヒューマンスケールの変化である。

01: 扉戸全開



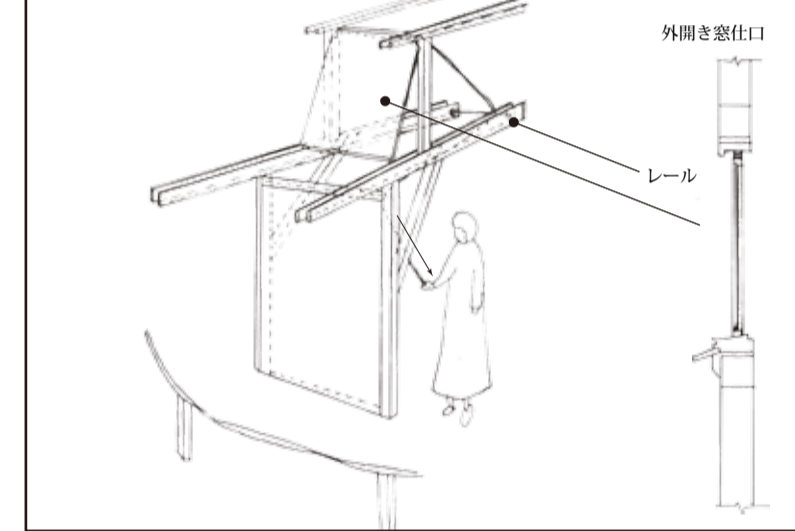
扉戸の上半分は、跳ね上げ式、下半分が外に倒れて床、濡れ縁と連続した縁台となる。下部扉は、女川間に伝わる気仙大工の工法を用いたデザインである。扉戸を上下、全開にすれば、外部にも広がりがあり、幅広い使用用途が見込まれる。

02: 上部戸開放、全面戸開放



扉戸を上部のみ開ければ、視線は通るが、空間としての隔たりを作る事が出来る。全面戸は、跳ね上げ式だが、開き具合は、内部の支えで調整している。

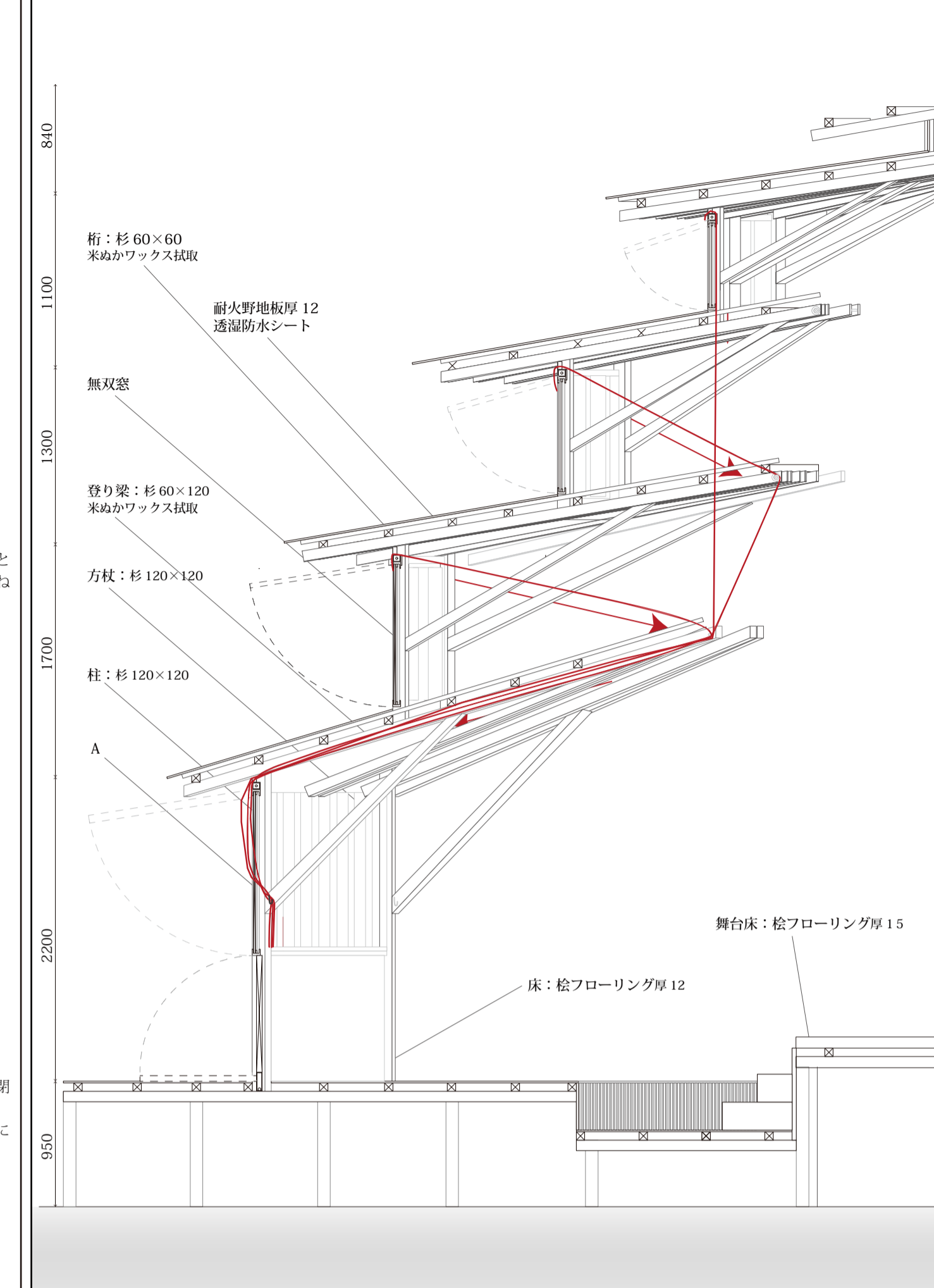
03: 上層の開口部の開閉



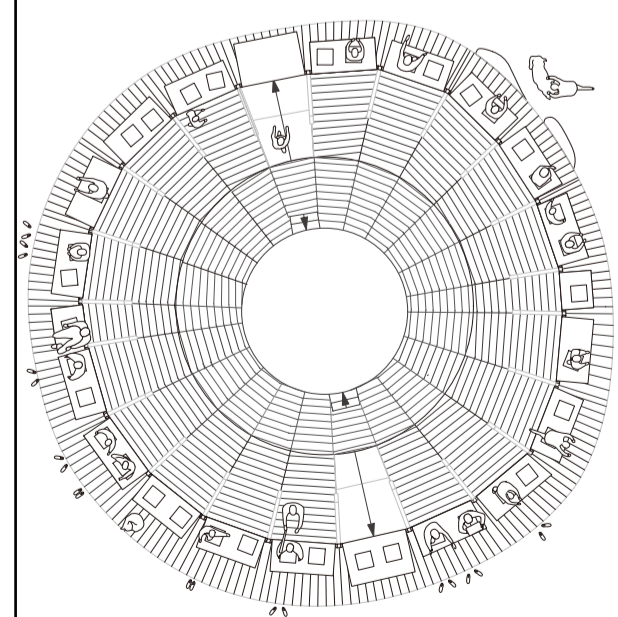
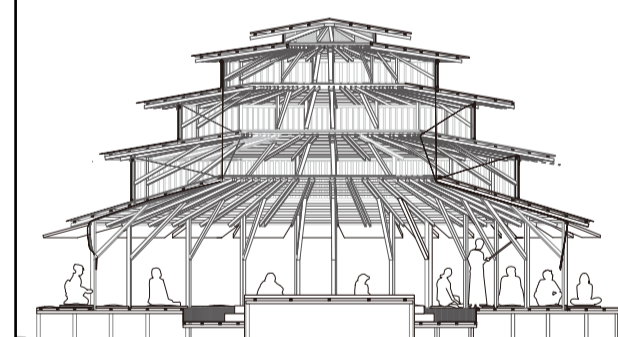
上層の開口部は、1階からの操作で開けられなければならない。登り梁に開閉の仕組みと成る紐をレールによって沿わせ、1階から人力で開閉する事が可能である。また、開く場合は、紐を固定し、閉じる場合は、紐に重りを付け、重りによって閉める仕組みである。

矩形図

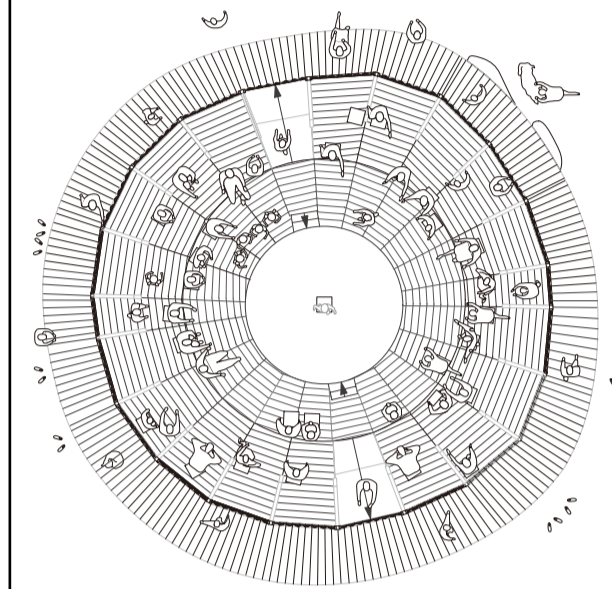
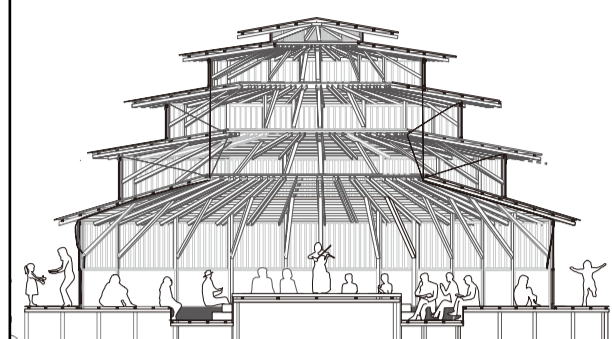
上層は、1階からの人力によって簡単に開けられる事が可能である。現状は、開閉のみであるが、上層の無双窓の開閉もまた、この力の流れを用いれば可能と考える。また、上層の窓を開けた状態のまま、保つためには1階のAに紐を括り付ける。



使用例 01. 座禅



使用例 02. 音乐会



使用例 03. 演劇

